



サステナブル・ファイナンス ウェビナー
～ 2050年カーボンニュートラルに向けての資金調達 ～

2021年3月9日（火） 17:00～18:30

Japanese followed by English

（講演要旨/文責事務局）

1. 経済産業省 表 尚志氏

現時点では、全てのエネルギーを純粋なグリーンで賄うことはできない。移行期の対応、議論も大切ではないか。日本は製造業が盛んなこともあり以前からこの移行期を重視してきた。2020年9月に発表された経産省の線略では、グリーン、技術革新、移行期の各段階でのファイナンスが必要な点を示した。グリーンではボンドが有効な手段になるが、現状まだ不十分。移行期では、定義が曖昧であることから、資金調達が難しいのが現状。業種別ロードマップの策定等で対応している。グリーン成長戦略では、5つのツールと14の成長分野を取り上げている。5つのツールには2兆円が投入される。移行期については、成果連動型の利子補給制度を触媒にして民間資金を活用。民間資金が投入されるための指針作りや第三者認証制度を確立していく。一連の支援制度については、在日欧州企業も活用可能。

2. 在欧日系ビジネス協議会（JBCE）木下 由香子氏

在欧日系企業の立場から、EUのタクソミーが国境を越えて活用されるためには、何が必要か、という観点からの意見をEU側に提出している。タクソミーについては、政策は前向きであるべきで、イノベーションをサポートし、ブラウンを罰するものではないことが肝要。技術スクリーニング基準については、企業が実行可能なグローバルで既存の制度とも調和したものであるべき。タクソミーの制度で開示される企業情報は、企業全体のサステナビリティ全体を表わしているわけではないことから、評価の正しい開示基準を設けるべき。サステナブルファイナンスに関しては、1)タクソミーの用途拡大については賛成するが、これのみが事業の判断基準となることに反対を表明、2)情報開示についてはタクソミーだけではなく定性情報も重要、3)グローバルな視点が必要。IPSFのみならず、G7、G20、OECD等との視点の整合性も重要、と考えている。日欧の協力でグローバルな仕組みが実現できれば、企業にも有益。今後の課題としては、1)タクソミーの見直しと技術革新のタイミングのズレが生じないか、2)グリーンなものだけに投資が促進されるのではないか、3)タクソミーの情報はどう集め、計算するのか、4)金融機関はどの程度この情報を活用するのか、5)社会全体へのタクソミーの適用、貢献は可能か、といった点を共有しておきたい。



3. The Principles for Responsible Investment (PRI), Mr. Nathan Fabian

説明ポイントは3点。サステナブルファイナンスの枠組みについてのポイントは3つ。投資の流れを変えること、サステナビリティをリスク管理の中に組み入れること、透明性と長期的な視野をもつこと。欧州ではこのために政策が導入されている。タクソノミー、標準ラベルの導入、サステナブルな投資の促進など。タクソノミーの基準はその中の重要な要素。そのためタクソノミーはシンプルであるべき。サステナブルファイナンスは、EUのグリーンデール政策のひとつであり、他にも気候変動、生物多様性、移行ファンド等の要素も考慮すべき。基準の導入は各分野への影響を考慮しなくてはならない。タクソノミーは単に排出ガスを測定するだけではない。タクソノミーは、2030年、2050年の目標を達成するためのリストになる。何がサステナブルで、そのレベルを計測し、活動の方向性を明確にするもの。EUではすでに法制化されている。現時点ですぐにグリーンが達成できない分野についての扱いは重要。今ある最善の基準は何かを見極め、近づくことが大切。また、その基準に近づこうとする企業に資金が回るようにすることも重要。現在EUの中では、排出量の90%がタクソノミーでカバーされている。タクソノミーはグリーン・トランジション・ファイナンスには有効な基準として活用され始めている。

4. BusinessEurope, Mr. Alexandre Affre

サステナブルファイナンスの中でもタクソノミーについて触れる。タクソノミーのメリットと課題。メリットは、タクソノミーという共通言語を使って投資をグリーンに向かわせることが可能とうこと。タクソノミーのレギュレーションは、初めてありとあらゆる環境関連の目標、規制、制度をEUで統一しようとするもので、ここまで広範囲でかつ細かな仕組みは今までにはなかったもの。課題は、情報開示の具体的な方法はどうなるのか、基準を満たせない場合罰則が適用されるのか、社会的なタクソノミーをどうとらえるのか、タクソノミーを公的な投資にどう活用していくのか等。こうした観点からも議論していくべき。

(ディスカッション)

田辺：スピーカー相互に質問は？

木下：タクソノミーの制度は複雑だが、企業が競争力を強化や市場の獲得に活用できるような使い方はできないのか。RPIのFabianさんにアドバイスをいただきたい。

Fabian: 資金調達の際の物語をつくるとうこと。自分たちはもっとグリーンになった、といえるようなストーリーにもっていくことが企業の発展につながるのではないか。

表：経産省にいて、基準作りにおいて細かな基準を策定していたが、EUから学んだこととして、目標は政府が設定して、後は企業が工夫して決める、というやり方があった。カーボンニュートラルの場合はどうなのか。タクソノミーはかなり細部にわたる規則だと思う



が。

Fabian: タクソミーはラベルを張るようなもので、何を強制的にやれということではない。期待されているのは透明性の方だ。

Affre: この点は Fabian さんと基本的に同意見。一方で、日本ではタクソミーのロードマップの話がよくでていと理解しているが、大きなブレークスルーが見込まれる可能性はいかがか。

表: 日本ではイノベーションが起こる可能性は高いと思っている。一方で、そのためには投資が必要で、またロードマップも常に見直す必要がある。EU との大きな相違は、カーボンプライシングが日本ではこれから、という段階であること。本格導入によって、カーボンニュートラルを後押しすることができると思う。

田辺: タクソミーの第三者認証は認証か認定か。

表: 現段階ではまだどちらか決定していない。

田辺: タクソミーに入る分野は今後も増えていくのか。

Fabian: EU として常に対象を見直して拡大させていくのは必然と考える。

以上